

年間第9主日の説教

金 大烈 神父 2011年3月6日(日)

《靈魂の城を岩の上に建てましょう》

主の平安。

皆様、この一週間よく過ごされたでしょうか？

若いときは特に青年の頃は、テレビや道で目に入った立派な家を見たらなんかして自分もこのような家を建てて幸せに生きたいという気持ちがあります。だんだん60代70代になると建物については欲が無くなります。そうではありませんか？どの人でも人間は立派な家を建てて住みたい気持ちを持っています。修道者たちもうちの修道院をきれいに建て替えて祈れるようになったらいいなあという望みを持つかもしれません。司祭である私も他の教会の立派な聖堂を見たら腹が立ちます。(笑い)「うちも立派な教会を建てて誇らしいところでミサができればいいなあ・・・」と思うのは当たり前かもしれません。しかし、このような希望や欲望も歳とともにだんだん色が変わります。こんなものそんなに大事でないんだという結論に至る方もいらっしゃると思います。今まで人間的な希望や欲のためにやってきたとしたら、それ以外の希望について考える時がきていいんじゃないかと思います。

さあ、皆様の心の家はどうですか？ 靈魂の家はどうなっているんでしょうか？

今日の福音(マタイ 7・21-27)のように岩の上に建てられているでしょうか？ 靈魂の家といえはとこしえに私達が住まわなければならない家を意味します。絶対変わらない家です。その家を築くために、岩の上に建てようとどの位がんばってきたんでしょうか。どの位心を配りながらやってきたんでしょうか。結局私達が求めなければならないことは、建てようとしなければならない建物はこの靈魂の建物じゃないでしょうか。何か虚しくなっても、崩れても自分がとこしえに住まわなければならない住みかである建物には命をかけるべきではないでしょうか。私達が今建てている、住んでいる靈魂の城はどんな状態になっているんでしょうか。もしかして砂の上にあるのではないのでしょうか。半分くらいは岩のような硬い土台に建っているのでしょうか。私たちがこの世の中にいるうちは砂の上と岩の上を行ったり来たりしながら生きています。しかし、私達は岩の上に自分の靈魂の城を建てようとする気持ちはいつも保たなければなりません。それをするために何をすればいいのでしょうか？その答えは今日の福音にあります。「主よ、主よ、と言うものが皆、天の国に入るわけではない。」「主よ、主よ」というのは当たり前です。しかし、み言葉を聞いて行なわなければできないことが、主の住まい(国)に入ることです。

皆様、少し深刻に考えてみましょう。使徒パウロは「振る舞いの無い信仰は死んだ信仰です。」とはっきりおっしゃっています。私達の信仰はどういう色を持っているんでしょうか。どういう形を持っているんでしょうか？ 私達の信仰によって生かされる何かがあるんでしょうか。ただ自分の満足のため、安心のための幻のようなものではないでしょうか。私達は何を信じているんでしょうか。それを

信じた自然の反応は何でしょうか。それを意識しなかったら結局私達は最後まで砂の上に家を建てようとするのと同じじゃないかと思います。

お願いします。これからでもできるだけ靈魂の救い、魂の救いのためにがんばって下さい。そのためにみ旨を意識すること。イエス様の教えの道を歩むこと。それによって自然に強く建てられるのが靈魂の城であり家であることを信じましょう。いつも彷徨^{さまよ}う心なら彷徨う心自体が砂の上です。風が吹いても雨が降っても何があってもかまいません。わたしたちは大きい土台である主が支えてくださるから。

今日の福音のメッセージはある意味私達が最後までとらなければならない一番大事なメッセージかもしれません。何のために生きているのか。何のためにこうしているのかを意識して下さい。もし万が一、それが靈魂にふさわしくないことならそこから離れて下さい。

ありがとうございました。